

安田女子大学紀要 48, 67-76 2020.

成人期におけるジェネラティヴィティの発達変容に関する試論

永 田 彰 子

A Preliminary Discussion on Development of Generativity in Adulthood

Akiko NAGATA

児童教育学科, 教育学部,
安田女子大学

要 旨

本稿では、Erikson理論におけるジェネラティヴィティに着目し、自己や他者への関わり方の在り方について検討した。特にジェネラティヴィティに関する質的研究として注目されているジェネラティヴィティ・ステイタスについて、これまでのErikson理論にかかわる先行研究や他領域で示唆されている視点と比較し論じた。

これまでの示唆された視点を概観すると、成人期における危機的状況への取り組みにおいて自己及び他者、両者への“ケア”の存在が確認された。さらに、“ケア”を通して他者にコミットすること自体が“ケア”対象の変化や拡大を生み、そのプロセスの中で“ケア”する自己自身の自己変革をもたらす可能性を指摘した。つまり、ジェネラティヴィティ・ステイタスは、“ケア”対象の変化や拡大の結果、ステイタスが変化する場合があると考えられた。今後はステイタスに至るプロセスを質的、縦断的に検討することにより、ジェネラティヴィティの発達変容の可能性を明らかにすることが求められる。

キーワード：ジェネラティヴィティ、発達、ケア対象の拡大、Erikson

は じ め に

成人中期以降の者が社会の中で支援提供者として活躍することは、高齢化の進むわが国にとって今後ますます求められる。家庭内に限らず、地域や社会の中で中年期世代の者が何らかの役割を持ち、社会に貢献する報告は多くみられる（田淵, 2016）。例えば、子育ての文脈では、近年急速に進む孤立した子育て環境にある若い子育て家庭を地域のボランティアとして支援するシニア世代による子育て支援活動などがあげられる（田淵・権藤, 2011; 寺本・柴原, 2015）。一方で、このような社会貢献の活動においては支援の負担は皆無ではない。それにもかかわらず利他性を発揮し、社会貢献行動や支援提供を行おうとするのだろうか（田淵, 2016）。これらの問いに対して、成人中期から後期の利他的行動は、支援提供する者の心理的な幸福感につながる事が報告されている（例えば、An & Cooney, 2006; Aubin & McAdams, 1995）。つまり、ときに自分

の身体的負担というリスクを負いつつも、他者のためになる支援提供を行うことで、生きがいや地域での役割を獲得し、幸福感が高まるということが考えられる。当然であるが、このような他者へのコミットメント傾向に関して、利他的行動による幸福感の獲得が目的とされているとは考えにくい。

本稿では、なぜ人は他者とのかわりにコミットしようとするのかについて、成人期の他者への利他的行動意欲を説明する有力な理論としてErikson (1950) のジェネラティヴィティ (田淵・権藤, 2011) に着目し検討することとする。この理論ではジェネラティヴィティは中年・老年期の重要な発達課題として位置づけられている (讃井・河野, 2014)。ジェネラティヴィティはEriksonによる造語とされ、生殖性、世代性、世代継承性など様々に訳されてきたが、定まった日本語の訳語はまだみられない (串崎, 2013)。

永田 (2019) は、成人期の自己のとらえ直しについて、Eriksonの理論におけるジェネラティヴィティを手がかりに考察している。この研究では、成人期の自己のとらえ直しに関して、過去の先行研究で明らかにされている再体制化の視点が、ジェネラティヴィティを検討する際に有効かについて論じている。本研究では、さらにジェネラティヴィティをとらえる方法論について先行研究をもとに論じ、“ケア”対象の拡大によるジェネラティヴィティの発達変容をとらえる視点について考察する。

1. 成人期における発達課題としてのジェネラティヴィティ

生涯発達心理学の観点から心理社会的発達理論を提唱したEriksonは、成人期の発達課題としてジェネラティヴィティを示し、ジェネラティヴィティを「次世代を確立させて導くことへの関心」と定義したErikson (1950, 仁科訳 1977-1980, p.343)。後に、Erikson & Erikson (1997, 村瀬・近藤訳2001.p.88) においては、以下のように再定義されている。

成人期には、生殖性対自己一耽溺と停滞 (generativity vs. self-absorption and stagnation) という重大な対立命題が与えられている。この生殖性は、子孫を生み出すこと (procreativity)、生産性 (productive)、創造性 (creativity) を包含するものであり、(自分自身の) 更なる同一性の開発に関わる一種の自己一生殖 (self-generation) も含めて、新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すこと (ジェネレーション) を表している。

つまり、ジェネラティヴィティとは、子どもを産むという意味においての生殖性という狭義の意味内容も含め、次なる世代、新たな社会の構築に関わっていくということである。Holsizer, Murphey, Noam, Yaylor, Erikson, & Erikson (1982) は、ジェネラティヴィティは本来、子どものケア、次世代から求められるものとの出会い、仕事と自分の家族、もしくは自分にとって身近な広く家族に代わる存在との生活との統合、“世界イメージの出現内での文化的潜在能力”の創造的な表明などの多様な活動との関わりを通して達成されるものであるとしている。

2. ジェネラティヴィティ・ステータスの分類の考え方

Eriksonのアイデンティティ論をもとにMarcia (1966) はアイデンティティ・ステータス論を提唱した。Marcia (1966) は人生の危機的場面の対処の在り方に関するEriksonの示唆を十分に

考察したうえで、アイデンティティ達成の測定には、危機 (crisis) と積極的関与 (commitment) の2つの基準が重要であるとした。このアイデンティティ・ステイタス論をもとに、Bradley (1997) と Bradley & Marcia (1998) はジェネラティヴィティを測定する方法としてジェネラティヴィティ・ステイタス・インタビューを開発している。

ジェネラティヴィティ・ステイタス・インタビューでは、ジェネラティヴィティ・ステイタスを分類する基準 (プロトタイプスタイル) として、「熱意 involvement」と「包容性 inclusivity」を重視する。「熱意」とは、行動に関する自己や他者の成長への能動的な関心、技術や能力を発達させたり共有したりすることへの責任の感覚、最後までコミットする能力などの程度を反映している。「包容性」とは誰が、また何が自分のケアの範囲に含まれて、含まれないかということに関係する。具体的なインタビューでの質問は、仕事 (work)、地域 (community)、家族 (family)、個人的な関心 (personal concerns) の4領域について構成されている。

具体的な項目として、仕事の領域では、「自分の仕事についてどのように感じているか。自分の人生の他の事柄と比べて仕事はどのくらい重要か」「あなたは自分の仕事の目標を達成したと思うか」「あなたにとって価値ある達成は何か」などが尋ねられる。地域の領域では、「地域で社会的もしくは政治的な問題であると感じていることはあるか。それに対して積極的に関わっているか」「あなたは地域もしくはボランティア活動に関わっているか。もしそうであるならば何がそのことにあなたを引き寄せているのか」などが尋ねられる。家族の領域では、「子ども（もしくは身近に感じている子どもに代わる存在）が選択する方針についてどのように感じているか。それはあなたが期待していたことか」「彼らの成長に対して自分が影響を与えたことについてどう思うか」「パートナー（配偶者もしくはそれに代わる存在）との関係をどのように説明するか」「その他の親戚もしくは友人で特に関わっているもしくは心配している人はいるか」などが尋ねられる。個人的な関心の領域では、「主な目標や関心は何か。10～20年前に感じていたことと異なっているか」「今のあなたを形作るために長年にわたって重要な人は誰か。重要な出来事は何か」「人生で生産的ではない経験をしたか。それが起こった時にどのように感じたか」「病気になったらどのように対応するか」などが尋ねられる。

	熱意 (Involvement)		包容性 (Inclusivity)	
	自分自身	他者	自分自身	他者
世代的 (generative)	高い	高い	高い	高い
担い手的 (agentic)	高い	低い	高い	低い
協同的 (communal)	低い	高い	低い	高い
慣習的 (conventional)	高い (もしくは中程度)	高い	低い (もしくは中程度)	低い
停滞的 (stagnant)	低い	低い	低い (もしくは自由放任の)	低い

図1. 「熱意」と「包容性」の相の構成により定義されたジェネラティヴィティ・ステイタスプロトタイプモデル (Bradley & Marcia, 1998)

ジェネラティヴィティ・ステイタスは、自分自身、そして他者に対しての「熱意」と、自分自身、そして他者に対しての「包容性」の程度の組み合わせによって分類される（図1）。自分自身、他者それぞれについて、高低の組み合わせにより、世代的ステイタス、担い手的ステイタス、協同的ステイタス、慣習的ステイタス、停滞的ステイタスの5つに同定される。それぞれのステイタスの状態像は次の通りである。世代的ステイタスは、自分の仕事や若い人の成長に深くかかわり、広く社会の出来事に関心を持っている。異なる考えや伝統に対して寛容であり、ケアと、自分自身と他者に対する思いやりとのバランスと取ることができる。慣習的ステイタスは、世代的ステイタスと同様に熱意は高いが、自分や他者への包容性は低い。担い手的ステイタスは、自分自身の仕事や興味に没頭し、自己に対する関心は高いが、他者に対しては低い。このタイプの人は、若い人に対して強固な指導が必要であると感じており、これまで築いてきた価値観やライフスタイルを変化させることは困難である。協同的ステイタスは、他者に対して高い投資をするが、自分の意思は後回しにしてしまう。停滞的ステイタスは、熱意と包容性の両者ともに低く、自己を取り巻く世界とのケアを通した相互作用はほとんどなく、自己についての満足感も低い。

Bradley & Marcia (1998) は42歳から64歳の成人中期から後期の対象者に対して上記の内容のインタビューを行い、ジェネラティヴィティ・ステイタスの妥当性を立証している。しかしながら、ジェネラティヴィティ・ステイタス間の変化の可能性については、これまで明らかにされていない。その他の先行研究や他領域の先行研究において、ジェネラティヴィティ・ステイタスという用語は用いていないが、変化の可能性を示唆する研究が幾つかみられる。次項以降ではこれらの研究を概観する。

3. 成人中期に遭遇するライフイベントと自己の問い直し

成人中期以降には心身の変化や限界感に遭遇することが指摘されている（堀内, 1993; 岡本, 1985）。岡本（1985, 1994, 1997）の一連の研究によると、中年期以前に獲得されたアイデンティティは、中年期に遭遇する自己の体力や身体機能の衰え、社会的な限界感の認知、時間的展望の狭まりと逆転、家庭内外の対人関係の変化のなかで崩壊あるいは大きく動揺する。そのような中年期の危機の中で、自己の有限性を自覚することによって、心の深いところから浮かび上がってくる自己への問いに対する真摯な内省と自己探求から新たな自己の在り方が組み直されていくというアイデンティティの再体制化が生起するのである。言うなれば、中年期に遭遇する中年期危機こそが、新たな自己の在り方の模索を促し、自己の問い直しを喚起する要因といっても過言ではないだろう。

4. ライフイベントにおける危機の文脈に焦点をあてる意義

死は人生を通してかかわりを持つ主題であり、死の主題に取り組むことは成人中期以降、より良く生きるために必要な課題である（丹下・西田・富田・大塚・安藤・下方, 2016）。Frankl (1972) によると、人は死を目前にした時、自分の存在価値、自分の人生に意味を見出したいとの自己の確認欲求が高まるという。このことは近年の実証研究でも、死は人々に若干の否定的な感情を起こさせつつも、同時に生きることへの積極的／肯定的な影響を与えうるものでもあることが確認

されている（丹下・西田・富田・大塚・安藤・下方, 2016）。一方で、このような自己確認の欲求は、つまり自己の在り方の模索は、死を目前にした時のみならず、これまでの自己では立ち行かない人生の困難な状況に遭遇した際に喚起されることが予想される。

堀田（2016）は、大学生を対象とした研究により重大なネガティブ体験の意味づけについて検討し、意味づけの過程が自己概念の変容に与える影響について論じている。この研究では“意味づけ（meaning making）”とは臨床心理学の研究領域においてあるストレスフルな出来事、特に重大なネガティブ体験に直面した後の適応過程を説明する概念として提唱されている。さらに堀田（2016）は、“意味”という語が非常に多義的であることが影響し、“意味づけ”の定義が研究者によってさまざまであることを指摘している。例えば、Folkman & Moskowitz（2000）は“意味づけ”を“個人が主観的に極めてストレスフルであると評価した出来事に対して行われる認知的対処”と定義している一方で、“自伝的記憶の再構成”（Bluck & Habermas, 2001）、“認知構造の再構成”（Walker & Winter, 2007）、“重大な苦痛を経験したにも拘わらず、精神的健康を維持する個人や、そうした経験を契機にしてより高い精神的成長あるいは人格変容を遂げる個人の心理学的プロセスを解明する概念”（羽島・小玉, 2009）などを堀田（2016）はあげている。

ネガティブライフイベントに着目し自己の変容を指摘している研究はいくつか見られる。例えば、Rollo（1970）によると、病気になった患者は自分が病気であるという事実と直面し、病気であるという残酷なまでに決定的な事実を新しい自己認識への身として生かしてゆき、肉体的な健康を築き上げるだけでなく、病気であったという経験を通して、人間的に根本から拡大されるのである。同様の視点として、河村・稲垣（2015）は、死と直面した患者が自己を振り返り、病気という体験を通して、不安定な精神状態を乗り越え、新しい自己を再生する過程を導き出している。さらに、患者は、疾患体験後、意識が自己から他者へ向けられるように拡大していくことを指摘している。

つまり、重大な苦痛を経験したにも拘わらず、そうした経験を契機にしてより高い精神的成長あるいは人格変容を遂げ（羽島・小玉, 2009）、その内容はコミットする対象が自己のみならず他者へと拡大する可能性が考えられる。このことに関連して永田（2019）は、心理社会的存在である我々は他者との関係の中で直接的、間接的に作用しあいながら自己の組み直しを行っていること、さらにこの組み直しは一度行われれば終わりという性質のものではなく、さまざまな苦悩に出会うたびに新たに組み直され、再体制化され続けるものであること、成人期のジェネラティヴィティの相においては、次第に普遍的社会的性を獲得するという一つの発達の方向性があるとしている。

5. ジェネラティヴィティ・ステイタスを発達の観点からとらえる視座

Bradley（1997）とBradley & Marcia（1998）によるジェネラティヴィティ・ステイタスの開発は、実証的研究としてジェネラティヴィティの意義を改めて我々に示した。これまで量的アプローチに基づいた得点の高低でジェネラティヴィティの程度を測定する研究が主流であったことに対し（例えば、Keyes & Ryff, 1988; McAdams, de St. Aubin, & Logan, 1992; 串崎, 2005; 丸島, 2005; 丸島・有光, 2007; 中西・佐方, 2001; 田淵, 2009）、質的アプローチによる新たなジェネラティヴィティ研究の方向性を提示した意義は大変大きい。つまり、ジェネラティヴィティ・ステイタスの観点から、自己や他者に対するケアの程度に着目し、それらがどの程度の「熱意」と「包

容性」であるかを検討することにより、ステイタスの質的差異を明らかにするスケールを導き出したのである。この研究はジェネラティヴィティへの質的な研究アプローチという新たな視点であり、ジェネラティヴィティ研究に大きく影響を与えた（田淵, 2010）。

一方で、発達の観点からジェネラティヴィティ・ステイタスに注目すると、縦断的観点にたつとき、個人においてステイタス間の移動が生じる可能性があるのではないだろうか。もしあるとするならばどのようにその変化は生じるのか、またそのプロセスはどのような様態であるかについて今後明らかにしていく必要があるだろう。

筆者は、このステイタス間の移動の可能性のなかでも特に低位から高位への発達の可能性に注目している。そしてそこには、危機への個人の取り組みが関係しているのではないかと考えている。先述したように、中年期以降は自己内外のさまざまな変化のなかで、これまでの自分自身の在り方では立ち行かない大きな困難に遭遇する。自分自身の在り方の揺らぎのなかで、自分自身や他者との関係の持ち方、在り方に変化が生じる可能性がある。例えば、自己充足への関心が高く、他者や次世代への関心やコミットメントが低かった人が、自分自身の在り方の変容を迫られる危機に遭遇し、危機について自分の人生への意味づけにコミットしていく中で、自己への関心のみならず、意味づけの内容が普遍的社会性を持つものとして他者や次世代への関心へと拡大するという変化の可能性である（永田, 2019）。

ところで、Erikson & Erikson (1997) はジェネラティヴィティについて次のように説いている。

ジェネラティヴィティ対停滞という対立命題から現れる新たな「徳」つまり「ケア」¹はこれまで大切にしてきた人や物や観念の面倒を見ることへのより広汎な関与である。よく見れば、乳児期から前成人期に至るこれまでの発達過程で順次生まれてきた強さ（希望と意志、目的と記述、忠誠と愛）は、次の世代の強さを育むという、この世代継承的課題に全て不可欠なものであることが明らかになる。

ジェネラティヴィティの対立命題は停滞（stagnation）である。この対立命題から立ち現れてくる徳（virtue）はケアである。つまり、ジェネラティヴィティにおいて重要なポイントとなることは、次世代の生成へ向かうか否かの葛藤を克服することにより“ケア”という心理社会的強さを獲得することにあるのである（新木, 2011; 今田, 2006）。さらにEriksonはこの“ケア”を、我々がイメージする“世話”や“介護”といった狭義の意味ではなく、人、物、観念に対する広汎な関与であるとしているのである。先に示したジェネラティヴィティ・ステイタスにおいても自己及び他者に対する「熱意」と「包容性」をとらえる際には、人、物、観念に対しての関与としての“ケア”の在り方が重視される。自分が世話をすることを学んできた人や産物、観念の面倒をみることへの、ますます広がるコミットメントである（白井, 2015）。

ケアについて哲学的な考察を行っているMayeroff (1987) は、著書『ケアの本質』のなかで、ケアについて次のように説いている。

¹ Erikson & Erikson (1997)の翻訳では「世話」とされているが、本稿では原語のまま「ケア」と表記する。

相手をケアすることにおいて、その成長に対して援助することにおいて、私は自己を実現する結果になるのである。作家は自分の構想をケアすることにおいて成長し、教師は学生をケアすることによって成長し、親は子供をケアすることによって成長する。言い換えれば、信頼、理解力、勇気、責任、専心、正直に潜む力を引き出して、私自身も成長するのである。私は自己の関心が他者に焦点化しているので、そのような力を自由に駆使できるのである。
他者が成長していくために私を必要とするというだけでなく、私も自分自身であるために、ケアの対象たるべき他者を必要としているのである。(69頁)

つまり、ケアとは本質的な意味においては何かのために、誰かのためになされるものではない。他者の自己実現を支えることは、ケアをする自分自身の生活を方向づけ、自分にとって何が適切で何が不適切かの感覚を提示してくれる (Mayeroff, 1987)。

ジェネラティヴィティ・ステイタスにおいては、“ケア”の対象を他者のみならず自己も含めている。つまりMayeroffの“ケア”に関する示唆とErikson理論に基づくジェネラティヴィティ・ステイタス論は、自己を抜きにした利他的な“ケア”ではなく、自己の“ケア”、他者の“ケア”の両者を重視しているという意味において一致している。さらに、先に述べたネガティブライフイベントに関する先行研究 (羽島・小玉, 2009; 河村・稲垣, 2015) においても、コミットする対象が自己のみならず他者へと拡大する可能性を指摘したが、ここでも自己のみならず他者の視点が併せて指摘されている。

ジェネラティヴィティ・ステイタスにおいては、対象として自己および他者の両者について“ケア”の程度の高低の組み合わせで個人差を導き出しているが、“ケア”の程度の高低は変動するものかについては明らかにされていない。つまり危機を経験し、自己の揺らぎを繰り返すなかで個人内での“ケア”の在り方に変化が生じ、“ケア”対象の変化や拡大が生じる可能性はあるのかという問題である。これには、質的かつ、縦断的アプローチもしくは回想法的アプローチによる検討が今後求められるところである。

お わ り に

本稿では、発達の観点からジェネラティヴィティの発達変容の可能性について、これまで先行研究で示されている視点を取り上げ論じてきた。

これまでの示唆された視点を概観すると、ケアを通して他者にコミットすること自体が“ケア”対象の変化や拡大を生み、そのプロセスの中で“ケア”する自己自身の自己変革をもたらしということは十分に予想される。つまり、ジェネラティヴィティ・ステイタスは、一度そのステイタスになるとそのまま安定ではなく、“ケア”対象の変化や拡大の結果、ジェネラティヴィティ・ステイタスに変化する場合があるのではないかということである。今後はジェネラティヴィティ・ステイタスに関して、個人がそのステイタスに至るプロセスや、あるステイタスから異なるステイタスに変化するプロセス等を検討することにより、ジェネラティヴィティの発達変化を明らかにすることができるのではないだろうか。このような変化に着目した研究知見の蓄積が今後求められる。

引 用 文 献

- An, J. S., & Cooney, T.M. (2006) Psychological well-being in mid to late life: The role of generativity development and parent-child relationships across the lifespan. *International Journal of Behavioral Development*, 30, 410-421.
- 新木真理子. (2011) 特別養護老人ホーム職員のジェネラティヴィティと仕事の有能感の関連. 日本老年医学会雑誌, 48, 679-685.
- Aubin, E., & McAdams, D. P. (1995) The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction/ happiness with life and ego development. *Journal of Adult Development*, 2, 99-112.
- Bluck, S. & Habermas, T. (2001) Extending the study of autobiographical memory. Thinking back about life across the life span. *Review of General Psychology*, 5, 135-147.
- Bradley, C. L. (1997) Generativity-stagnation: Development of a status model. *Developmental Review*, 17, 262-290.
- Bradley, C. L. & Marcia J.E. (1998) Generativity-stagnation: A five-category model. *Journal of Personality*, 66, 39-64.
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*. New York: Norton.
- Erikson, E. H. & Erikson, J. M. (1997) *The Life Cycle Completed A Review Expanded Edition*, W. W. Norton. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結<増補版>』みすず書房 2001.
- Folman, S., & Moskowitz, J. (2000) Positive affect and the other side of coping. *American Psychologist*, 55, 647-654.
- Frankl, V. E. 著 (1972) / 山田邦男監訳：意味への意志. 春秋社, 32, 2002.
- 羽鳥健司・小玉正博. (2009) 我々は困難な状況でどう成長するのか—困難体験に対する肯定的意味づけの視点から— ヒューマン・ケア研究, 10, 101-103.
- Holsizer, D., Murphey, M., Noam, G., Taylor, C., Erikson, E., & Erikson, J. (1982) On generativity and identity: From a conversation with Erik and Joan Erikson. *Harvard Educational Review*, 51, 249-269.
- 堀田 亮. (2016) 重大なネガティブ体験の意味づけに関する心理学的研究. 風間書房.
- 堀内和美. (1993) 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較—. 教育心理学研究, 41, 11-21.
- 今田高俊. (2006) 特集／公共哲学と公共倫理 共生配慮型の公を開く. 公共研究, 2, 57-85.
- 河村敦子・稲垣順子. (2015) 壮年期から中年期の就労者における初回急性心筋梗塞の体験に関する現象学的研究. 山口医学, 64, 69-78.
- Keyes, C.L., & Ryff, C. D. (1998) Generativity in adult lives: social structural contours and quality of life consequences. In: D.P.McAdams and E. de St Aubin, Editors, *Generativity and adult development. How and why we care for the next generation*, APA, Washington,DC.
- 串崎幸代. (2005) E・H・Eriksonのジェネラティヴィティに関する基礎研究—多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して—. 心理臨床学研究, 23, 197-208.
- 串崎幸代. (2013) ケアの与え手に必要な心理的要因について—ジェネラティヴィティを支えるもの—. 千里金蘭大学紀要, 10, 79-83.
- Marcia, J. E. (1966) Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 丸島令子. (2005) 世代性尺度の作成：盛大性の関心と行動モデルの測定. 心理臨床学研究, 23, 422-433.
- 丸島令子・有光興紀. (2007) 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討. 心理学研究, 78, 303-309.
- Mayeroff, M. (1987) *On Caring*, 『ケアの本質』, 田村真訳, ゆみる出版.
- McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. (1992) A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography. *Journal of personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.
- 永田彰子. (2019) 成人期の自己のとらえ直しに関する試論—エリクソン理論のジェネラティヴィティを手がかりに—. 安田女子大学紀要, 47, 21-30.

- 中西信男・佐方哲彦. (2001) EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査—. 上里一郎 (監) 心理アセスメントハンドブック (第2版). 西村書店. Pp.365-376.
- 岡本祐子. (1985) 中年期の自我同一性に関する研究. 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子. (1994) 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.
- 岡本祐子. (1997) 中年期からのアイデンティティ発達の心理学. ナカニシヤ出版.
- Rollo May (小野泰博訳). (1970) 失われし自我をもとめて. 誠心書房.
- 讃井真理・河野保子. (2014) 高齢者のGenerativityにおける「関心」の特質、及び高齢者の生活に及ぼすGenerativityの検討. 看護学統合研究, 16, 6-17.
- 白井利明. (2015) 中年期のジェネラティヴィティとアイデンティティの関連についての研究課題—青年期との関連も視野に入れて—, 大阪教育大学紀要, 63, 65-71.
- 田淵 恵. (2009) 中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差：世代間交流とジェネラティヴィティの視点から. 生老病死の行動科学, 14, 3-12.
- 田淵 恵. (2010) 世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷. 生老病死の行動科学, 15, 13-20.
- 田淵 恵 (2016) 利他性の発達：支援提供と幸福感 佐藤眞一・権藤恭之 (編) Pp.156-157やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズよくわかる高齢者心理学 ミネルヴァ書房.
- 田淵 恵・権藤恭之. (2011) 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響. 心理学研究, 82, 392-398.
- 丹下智香子・西田裕紀子・富田真紀子・大塚 礼・安藤富士子・下方浩史. (2016) 成人中・後期における「死に対する態度」の縦断的検討. 発達心理学研究, 27, 232-242.
- 寺本妙子・柴原宣幸. (2015) 中高年女性による地域子育て支援に関する調査研究：現在の子育てに対する違和感について. 日本橋学館大学紀要, 14, 61-73.
- Walker, B. M., & Winter, D. A. (2007) The elaboration of personal construct psychology. *Annual Review of Psychology*, 58, 453-477.

[2019. 9. 26 受理]

コントリビューター：加藤 敏之 教授 (児童教育学科)

